

明治学院大学

# 心理学部 付属研究所 通信

2026 March 第18号

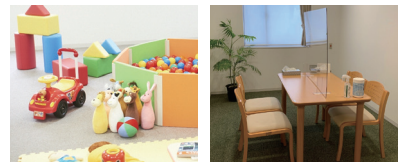
## ごあいさつ

本研究所が発行する「研究所通信」は、これまで本学心理学部と関わりのあった国内の大学や大学関係機関、ならびに幼稚園・保育所・小学校・中学校・特別支援学校等、約600か所にお届けしております。本通信をご覧になり、ご丁寧なお返事をお寄せくださった機関からは、通われているお子さんたちの様子に関するご紹介とともに、本学からの実習生やインターンシップの受け入れ、さらには研究へのご協力についての温かいお申し出を頂戴しました。研究所の趣旨をご理解いただいた上で、このようなご連絡をいただけたことを、地域に根ざした研究所として大変ありがたく感じております。現場における実践と研究、そして大学とさまざまな教育・専門機関が手を携え、人材育成に取り組もうとする姿勢に大きな希望を感じました。今後もそれぞれの立場から課題を共有し、互いの強みを生かしながら、教育や社会の課題にともに向き合っていきたいと考えております。引き続き、皆様のご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

心理学部付属研究所所長 海津 亜希子

## 相談・研究部門報告(心理臨床センター)

2025年度は、カウンセラー3名(臨床心理系2名、教育発達系1名)、アシスタントカウンセラー4名(臨床心理系2名、教育発達系2名)、助手、教学補佐、受付、専任教員という体制で、相談・研究部門(心理臨床センター)の運営を行いました。面接は、カウンセラー、アシスタントカウンセラー、助手、相談研修員(大学院生)、相談研修員のスーパーバイザーによって行われました。今年度も多くの心理面接や心理検査の申し込みがありました。地域の医療機関、教育機関、福祉機関等からのご紹介によって申し込まれた方も多くいます。今後も引き続き、地域の皆様の様々なニーズに応え、皆様に貢献できるよう努力していく所存です。



相談・研究部門主任 伊藤 拓

### 2025年度心理臨床センター利用者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
初回面接	14	8	12	3	4	4	6	4	5	6	1	67
継続面接	136	157	149	163	126	143	126	143	130	153	40	1466
心理検査	4	6	9	7	1	5	6	4	6	7	1	56
合計	154	171	170	173	131	152	138	151	141	166	42	1589

※2026年2月12日 現在

## 公開セミナー報告

2026年3月12日 14:30-16:30  
 明治学院大学白金キャンパス 本館1階  
 1101教室にて開催

杉山 恵理子 先生 (心理学科 教授)  
 足立 匡基 先生 (心理学科 准教授)



少子化や単身世帯の増加、子どもの貧困などを背景に、地域の孤立・孤独への向き合い方が問われています。本公開セミナーでは、建学の精神「Do for Others」を手がかりに、愛他性・利他性を心理学的に読み解き、「支える/支えられる」を超えた関係のつくり方を考えます。講師は認定NPO法人抱樸理事長・牧師の奥田知志氏。居場所づくり、住まいの確保、就労支援、医療・福祉との連携などを重ね、当事者に寄り添いながら歩みを共にする「伴走型支援」によって3,700人超の自立を支えてきた実践は、現場の知と希望に満ちています。基調講演に加え、本学教員との座談会や質疑を通して、「つながりの再構築」と「希望のまち」構想を手がかりに、地域で起こりうる分断や排除をどう乗り越えるか、そして私たち一人ひとりが日常の場で何を選び、どう行動できるのかを具体的に議論します。



明治学院大学心理臨床センター



学校、対人関係、性格、子育ての悩み…  
 お気軽にご相談ください。

予約電話 03-5421-5444

受付時間 火～土曜日 午前10時～午後5時30分

HP <https://psy.meijigakuin.ac.jp/clinic/>

※ホームページからご相談の予約はできません。お電話のみの受付となります。

心理学の学術的研究を進める拠点として調査・研究部門が2025年度行った主な活動は次の通りです。まず、専任教員を中心とするプロジェクト研究のサポートとして、萌芽研究プロジェクト4件、研究助成プロジェクト2件を採用し、支援を行いました。また2026年3月12日に、本研究所における取組みを地域社会に還元すべく、「Do for Others — 愛他性・利他性を心理学的に読み解く」と題した公開セミナーを開催する予定です。また、心理学部附属研究所年報19号の発刊を予定しております。これからも地域に密着した研究所として、心理学・教育発達学の視点から、地域社会に貢献する研究を推進してまいります。



調査・研究部門主任 垣花 真一郎

## 萌芽研究プロジェクト報告

### 対人コミュニケーション時の脳活動に関する検討



社会心理学  
田中 知恵  
(心理学科 教授)

金城 光 (心理学科 教授)  
宮本 聡介 (心理学科 教授)  
萩野谷 俊平 (心理学科 准教授)  
高田 圭二 (研究員)

対人コミュニケーションや集団の意思決定のメカニズムを検討するため、神経科学分野においては脳の機能活動を視覚化する取り組みが進められています。本研究ではNIRS(Near-infrared spectroscopy)の技術を用いた簡易型装置により、2者間の意思決定課題における前頭前野の脳血流量の変化を継続的に測定します。各課題においては、個別選択段階、両名で同時に選択を呈示する段階、両名でのコミュニケーションならびに選択決定段階という3フェーズを設定します。そして個別選択における一致・不一致、また話し合いフェーズにおける理由共有度認知等の変数も測定し、コミュニケーションにおける共有認知や選択が、脳活動における同期によって説明可能か検討をしています。

### 高校生を対象とした教職キャリア形成の支援プログラムの開発



体育科教育学  
岡田 悠佑  
(教育発達学科 助教)

辻 宏子 (教育発達学科 教授)  
根本 淳子 (教育発達学科 准教授)

労働環境等の問題に起因して教員不足が社会問題となっており、教員養成を担う大学には、教員に必要な専門的力量的の向上だけでなく、教員養成課程での学びを経て教職に就く「大学から教職へのトランジション」(峯村ほか・2022)を促す支援が求められています。そこで本研究では、教員養成における予期的社会化の時期とされる高校生を対象とした、教職キャリア形成の支援プログラムの開発に取り組みました。その際、現代社会の多様化・流動化といった特性を前提にしたキャリア支援の方法であるアウトリーチ型キャリア教育に着目しました。この方法では、キャリア形成において重要な知識や経験を有する人物を「ロールモデル」にして、受講者のキャリア形成を促すことが期待できます(溝口・2021)。

## 深層学習を用いた項目反応理論(Deep-IRT)の等化性能に関する基礎研究



教育心理学・心理統計学  
川端 一光  
(心理学科 教授)  
堤 瑛美子(研究員)

本プロジェクトでは、世界の大規模言語試験においてスコアリング手法として採用されている Item Response Theory (IRT) を、深層学習の枠組みで表現した Deep-IRT に関する方法論の開発を進めています。私たちの昨年度の研究では、IRTの代表的な統計モデルである 2母数ロジスティックモデルは、項目パラメタおよび能力パラメタに対応する独立した深層学習モデルとして表現可能であり、さらに欠測を含むデータ行列に対しても頑健な推定が可能であることが示されています。本プロジェクトでは、これらの知見を基に、別データで学習済みのネットワークパラメタを固定した上で、新たな項目や受検者のパラメタを推定する等化(固定母数等化法)を、深層学習における ファインチューニング技術を用いて実現することを目指しています。

## 認定こども園の身体活動環境における乳児クラスから幼児クラスへの円滑な移行要因の検討



幼児教育学  
松崎 洋子  
(教育発達学科 教授)  
石沢 順子(研究員)  
土橋 久美子(研究員)

認定こども園は2025年4月には1万1212園となり、2015年度に子ども・子育て支援新制度が始まってからの10年間で4倍近くに増加しました。認定こども園の幼児クラスでは、遊びや生活の経験が異なる子どもが同時に在籍する可能性が高いです。また、乳児(3歳未満児)と幼児(3歳以上児)では保育者の配置基準が異なり、運動機能の発達も顕著なため、保育内容や方法が異なることが予想されます。本研究では、この認定こども園における身体活動に関する環境に焦点を当て、乳児クラスから幼児クラスへと円滑に移行するために望ましい保育の要因を検討します。現在、認定こども園における2歳児クラスから3歳児クラスへの進級前後の保育者の意識や配慮、環境構成の実態、及び保育と子どもの身体活動の発達との関連を調査して移行要因の検討を進めています。

## 研究助成プロジェクト報告

### 「遊び／ドラマ／演劇醸造型集合体」に基づく演劇的手法による教員養成プログラムの開発



幼児教育学・演劇教育学・児童文化  
小林 由利子  
(教育発達学科 教授)  
根本 淳子(教育発達学科 准教授)

2025年度科研費に不採択となり、2026年度に向けて再検討が必要でした。昨年度の特別研究プロジェクトで演劇ワークショップを開催した際、本学部教員(中村敦雄教授)が参加し、共通の研究課題への関心が確認されました。これを契機に、小林・根本・中村の3名で演劇的手法の教育的意義や課題を検討する定期的な研究会を開始しました。研究会では「<遊び-ドラマ-演劇>醸造型」概念を基盤に、教員研修ワークショップの開発を目指し、2026年度科研費基盤研究(C)を申請しました。現在、醸造型の理論的枠組みやワークショップ設計の課題を精査しており、2026年2月にフォーラムを2回開催予定です。

## 登校しぶり発生時における家庭内の効果的な初期対応の検討



臨床行動分析・認知行動療法  
山田 達人  
(心理学科 助教)

本研究では、登校しぶりが生じた初期段階における家庭内の対応について、行動分析的に検討することを目的とした。分析の結果、【注目を浴びる場面からの回避】、【楽しい活動の欠如】、【友達と過ごす楽しさの不足】といった維持要因が、登校しぶりの長期化と関連する可能性が示された。これら要因が関与する場合、登校を一律に促す対応は、短期的には有効に見えても、苦痛に基づく回避行動を強化する恐れがある。したがって、初期段階では、「登校させる／休ませる」といった判断を急ぐのではなく、家庭内で何が得られ、何が回避されているのかという随伴性を整理し、維持要因に応じた関わり方と環境設定の検討が重要であると考えられる。